

活動報告書

報告者氏名: 平木智子 所属: 北九州市立小倉南特別支援学校 記録日: 2021年2月25日

キーワード: 聴覚障害、コミュニケーション、VOCA

【対象児の情報】

・学年

高等部1年 女子生徒

・障害名

聴覚障害、知的障害

・障害と困難の内容

・市内の聴覚特別支援学校に幼・小・中学部まで在籍しており、本年度、本校の知的障害・高等部に入学してきた。

・通常、人工内耳を装着しており、装着時の聴力は70-80db程度と思われる。音についての気づきはあるが、言葉として理解することは難しい。

・WISC-IV:FSIQ50(VCI51、PRI62、WMI57、PSI67) 令和2年1月14日

絵画語彙発達検査:5歳1か月 令和2年1月22日

・人と接することが好きで、積極的に関わろうとする。

・主なコミュニケーション手段は手話、指文字、身振りである。

・中学部まで聴覚特別支援学校だったため、手話以外で他人と関わる経験が少ない。

・話の内容がわからなくても、曖昧に答えることが多い。

・音の大きさが分からないため、大きな音を立てて荷物を置いたり、大声を出して周りの人を驚かせたりすることがある。

・好きなことを話したい気持ちが強く、話しかけてよい時間なのかを考えることができない。

・家族(病気のため)の送迎ができず、中学部まで学校を欠席することが多かった。

【活動目的】

・当初のねらい

①クラスの中で、絵カードやコミュニケーションアプリを使ってのコミュニケーション方法に慣れ、内容の大体(80%)を理解することができるようになる。

・手話や指文字に頼らないコミュニケーション手段を獲得するために、DropTalkを用いてコミュニケーションをとったり、自分で伝えたい内容の絵カードを作成したりする。

・自分の思いを一人で相手に伝えられるようになるために、授業の振り返りや発表で、アプリケーションを使い、伝えられるようにする。

・伝える学習はByTalkを日常的に使用する。国語で並べ替えや助詞の学習を行い、日常的なやり取りの中で活用できるようにする。また、上手く言い表せない時には感情フォントを用いて気軽に自分の思いを伝えることで、本生徒のストレス軽減にも気を配る。

→10月から北九州市でラインやメッセージなど個別のやり取りが禁止されたため、ByTalkが使用できなくなった。伝える学習は校内での実践のみに変更した

②学校生活の中で、扉の開閉音や人を呼ぶ時の声の大きさを意識できるようになる。

・音の気づきを得られない状況下において、音を意識して行動する習慣を身に付ける。AppleWatchのノイズ機能を使

用して自分が出している音を知り、適切な行動がとれるように調整していく。

・ノイズのアプリケーションを利用して周りの音を知る機会を作る。

③UDトークなどのアプリを活用し、音声での授業においても概要を把握する方法を体得する。

・高等部において手話ができる教師は担任の1名のみである。担任が付き添えない授業において、自分で音声を文字化するアプリケーションを用いて授業の概要を知る方法を獲得する。

・実施期間

2020年9月7日～ 実践中

・実施者

平木智子、研究協力者(北野啓子)

・実施者と対象児の関係

平木智子 教務

研究協力者(北野啓子) 担任

【活動内容と対象生徒の変化】

(対象生徒の事前の状況)

・学習は小学校1～2年生程度の内容を行っており、漢字に興味をもっている。

・筆談をしてコミュニケーションをとっているが、文章の間違いが多く伝わらないことがある。

・言葉の言い間違いや助詞の間違いが多く、文章読解が苦手である。

・場に関係のない話をすることがある。

(活動の具体的内容)

①クラスの中で、絵カードやコミュニケーションアプリを使ってのコミュニケーション方法に慣れ、内容の大体(80%)を理解することができるようになる。

◎本生徒は日常生活において友人や身近な人と携帯のメッセージを使ってやり取りをしたり、手話で思いや要求を伝えたりしている。現状、本生徒からクラスメイトへ積極的にコミュニケーションをとろうとしているが、手段が異なるためにできないもどかしさをもっている。また、本生徒は聴覚障害と知的障害を合わせ有するため、手話でのやり取りであっても十分に内容を理解できていないと考えられる。そして、手話と文字の一致もできていないと感じる場面も多くあった。そこで、下記のような手立てを取り、コミュニケーション手段を増やすとともに、手話と文字、表出したいこととその表出方法を学習する。



DropTalk

数多くあるコミュニケーションアプリから本生徒には DropTalk を使用した。選択理由は、3つある。1つ目は、本生徒は聴覚障害であるため、コミュニケーションが可視化できるものであること、2つ目は音声での表出ができること、そして、3つ目は携帯性に優れ、学校生活においてもっとも活用されているシンボルであり、他の生徒とのコミュニケーションがよりスムーズに行えることである。

・手話や指文字に頼らないコミュニケーション手段を獲得するために、DropTalk を用いてコミュニケーションをとったり、自分で伝えたい内容の絵カードを作成したりする。

・中度の知的障害の友達とは筆談ではコミュニケーションを取ることができないので、生徒が見慣れている DropTalk でやり取りをする方法を獲得することができる。

各場面でよく使うと思われる絵カードを作成して、使い方を指導した。すぐに使い方をマスターして、自分が伝えたい内容

を作成して欲しいと要求があった。そこで、本生徒に作成の手順を伝え、自分で作成することができるよう、作成方法を学ばせた。自分で作成できるようになると、好きな芸能人や発表したいことなどのカードを作ったり、シンボルにない言葉などはネットから見つけてカードを作成したりした。



②学校生活の中で、扉の開閉音や人を呼ぶ時の声の大きさを意識できるようになる。

・音の気づきを得られない状況下において、音を意識して行動する習慣を身に付ける。AppleWatch のノイズ機能を使用して自分が出している音を知り、適切な行動がとれるように調整していく。

・ノイズのアプリケーションを利用して周りの音を知る機会を作る。



dB Meter

貸与されているバージョンが3だったため、標準ではノイズ機能が使用できなかった。そこで、dB Meterというアプリケーションを使用して、1週間計測を行った。最大値は110dbで、平均が70dbであった。それぞれの数値がまわりの友達にどんな音として聞こえるのかをそれぞれ見てもらい、まわりの人にとって不快だと思われる生活音を一緒に決めた。そして、学校生活において、80db以上の音が出た時には AppleWatch に通知が行くように設定を行い、行動をとった時には AppleWatch を見て、どのくらいの音なのかを数値で確認する習慣をつけた。

③UD トークなどのアプリを活用し、音声での授業においても概要を把握する方法を体得する。



UD トーク

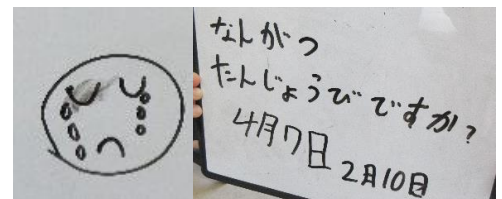
・高等部において手話ができる教師は担任の1名のみである。担任が付き添えない授業において、自分で音声を文字化するアプリケーションを用いて授業の概要を知る方法を獲得する。

授業中に UD トークを活用して概要の理解を進めている。しかし、雑音と変換の精度が悪く、なかなか活用できずにいる。現在主指導の教員に Bluetooth ヘッドフォンを装着してもらい感度をあげているが、他の生徒の生活音や声を拾うことも多く、上手く変換できていない。今後、他のアプリケーションも試しながら、授業理解への方法を模索したい。

(対象児の事後の変化)

①クラスの中で、絵カードやコミュニケーションアプリを使っでのコミュニケーション方法に慣れ、内容の大体(80%)を理解することができるようになる。

身振り手振りでやり取りをなんとなく進めて楽しんでいるところがあったが、どうしても伝えたい内容がある時にはホワイトボードに質問事項を書いて伝えていた。質問内容を理解することのできる生徒とはやり取りをすることができたが、中度から重度のクラスメイトとは筆談でのやり取りを進めていくことは難しかった。そこで、ホワイトボードに絵を描くと、重度の生徒にも理解できることがわかり、携帯を操作して、友達にカードを見せようとするが増えていった。正確に自分の思いを伝えたいという本生徒の思いに寄り添えていると思われる。



一方、絵に描くのは難しいアイドルの話や好きな本については、教師を捕まえて通訳を頼んでいたが、友達にはどうしても伝わらず、どうして伝わらないのかイライラしたり、それからその話をするのをやめて、別の話に切り替えたりしていた。しかし、DropTalk を使用できるようになって、教師を介さずに、自分でインターネットから画像を検索してカードを作り、友達とやり取りをすることで、ストレスなくコミュニケーション



を取ることができた。友達も口頭で説明され理解できずにいたが、画像を見ることで理解したり、興味を示してくれたりして会話が進み、本生徒も会話をやめてしまうことなく、多くのやり取りをすることができて、とても喜んでいた。また、友達も積極的に本生徒と関わる姿が見えた。以前はホワイトボードに質問を書いている間にいなくなったり、他の友達や先生と話していたりしていたが、携帯を操作している時は一緒にのぞき込んで検索している時も継続して話を進めていくこともできていた。

やり取りをする際によく使用する5W1Hについて、正確に答えることができず、会話が成立しないことが頻回に見られた。その反面、Yes、No で答える場面では的確に回答することができる。本生徒の体験からか、中重度のクラスメイトに対して、選択肢を設けてやり取りをしようとする場面が多くみられるようになった。クラスメイトのことを知りたいという本生徒のコミュニケーション力の高さが伺えた。

②学校生活の中で、扉の開閉音や人を呼ぶ時の声の大きさを意識できるようになる。

日頃、行動を取った時にどのくらいの音量なのかを AppleWatch ですぐに確認するようになった。また、DropTalk のカード作成に、「うるさい」というカードを作って欲しいと言ってきた。本生徒は聞こえないので、うるさいという思いにはならないと考えられた。しかし、このカードを選んだことで、本生徒がまわりから「うるさい」と言われていることを気にし始めていることが伺えた。少しずつ音に対する意識が身についていった。日常生活においても、AppleWatch で音を確認し、車や自転車などの存在を意識していける試みも取り組んでいるところである。



③UD トークなどのアプリを活用し、音声での授業においても概要を把握する方法を体得する。

上手く変換することができない状況を改善するために、設定等を含め、活用の検討を行い、本生徒が話の内容を知ることができる方法を模索していきたい。また、本生徒に対しては UD トークだけに頼らず、事前に活動内容をプリントにて配布し、理解を促すなどの補助的なものを活用するなどして、すべての授業で本生徒が積極的に参加できるよう支援体制を作っていきたい。

【報告者の気づきとエビデンス】

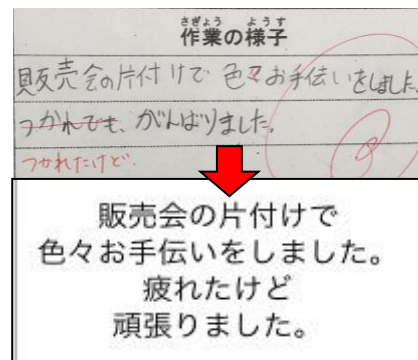
・主観的気づき

①クラスの中で、絵カードやコミュニケーションアプリを使っでのコミュニケーション方法に慣れ、内容の大体(80%)を理解することができるようになる。

ホワイトボードは友達との雑談や自分の要求を伝える時に主に使用した。しかし、文字を読める相手にしか通じず、誤字や脱字が多いためうまく伝わらないことも多かった。本生徒も「書くのは大変、ホワイトボードの持ち運びも疲れる。」と、時々弱気になることもあったが、イラストを使用するなど自分なりの工夫がみられた。ホワイトボードを用いた筆談が減ったのは、本生徒が言うように書く大変さや持ち運びのわずらわしさもあるが、本生徒の語彙数が少なかったり、誤字・脱字が多かったりすることで、相手にうまく伝わらないということが第一の原因だと考えられる。しかし、イラストを用いるなど本人

なりの工夫がみられるようになっており、今後の使用法の工夫により有効な手段となることが考えられる。また、状況に応じて、本生徒がホワイトボードやメモ帳、DropTalk を選択して使用している姿が見られた。場面や相手に応じて選べるツールが増えたことが本生徒にとって一番の成果だと思われる。

また、本生徒がコミュニケーションをとりたい相手に適切に自分の思いを伝えたいという気持ちは、DropTalk を使用した発表場面でも見られた。作業の報告場面において、反省ノートをもとに自分で作成できるようになった。その際に、文法等の間違いがあれば教師の訂正をもとに自分で作り直したり、出力される音声も音の高さや速度などを意識して作成したりするようになった。これは本生徒が声の高さや速度を友達から「男の人の声みたい」と指摘され、自分がイメージしているものと違ったことが影響している。その後、教師や友達と一緒に、みんなに違和感がない音声になるようにスピーチを調整するようになった。このことから、単に、自分の感想や報告をするツールから自分の分身のように変化したことが伺えた。



②学校生活の中で、扉の開閉音や人を呼ぶ時の声の大きさを意識できるようになる。

日常生活において、自分の今までの行動で、どの位の音量を出していたのかを AppleWatch の通知機能を使用することで知ることができた。通知が来た時にはすぐに画面上のデシベル数値を確認することで、日常動作が丁寧且つ静かになった。教室だけでなく、作業室や特別教室で担任外の先生や友達といる時も、生活音について注意を受けることはなくなった。聴覚に課題のある生徒に対し、数値として表示したり、瞬時に通知が来る機能を使用したりすることで、適切な行動を自分の意思で調整できたと考えられる。

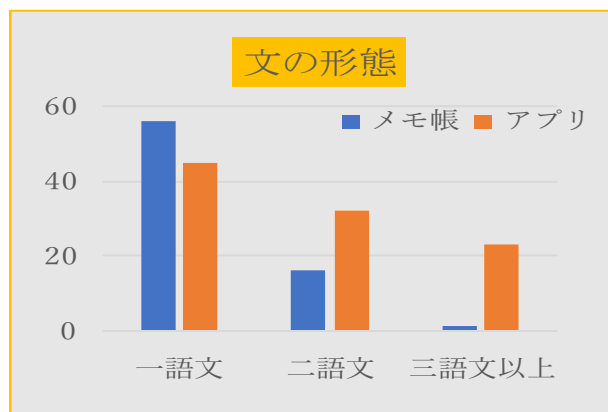
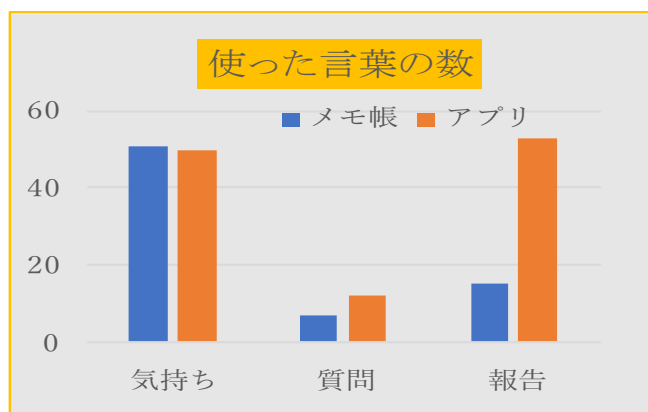
③UD トークなどのアプリを活用し、音声での授業においても概要を把握する方法を体得する。

授業などの場面においても活発に意見が交わされたり、廊下やとなりのクラスや班などの音を認識してしまったりと上手く表示できないことが多かった。しかし、本生徒にとって、全くわからない状況よりも少しでも手がかりのある状況の方がよいという思いが強く、時折変な変換に笑いながらも、使用することをやめることはなかった。それは、国語の授業において、友達の発表時に UD トークを用いることで、発表内容を理解できたように、ICT 機器を活用して友達の伝えようとすることを視覚的に理解できるような手段をとることがコミュニケーションには必要であると感じた。

今後、授業内での発言ルールや環境調整、事前に予想できる単語登録等を行いながら、最適なツールとなるよう模索したい。

・エビデンス

①クラスの中で、絵カードやコミュニケーションアプリを使っでのコミュニケーション方法に慣れ、内容の大体(80%)を理解することができるようになる。

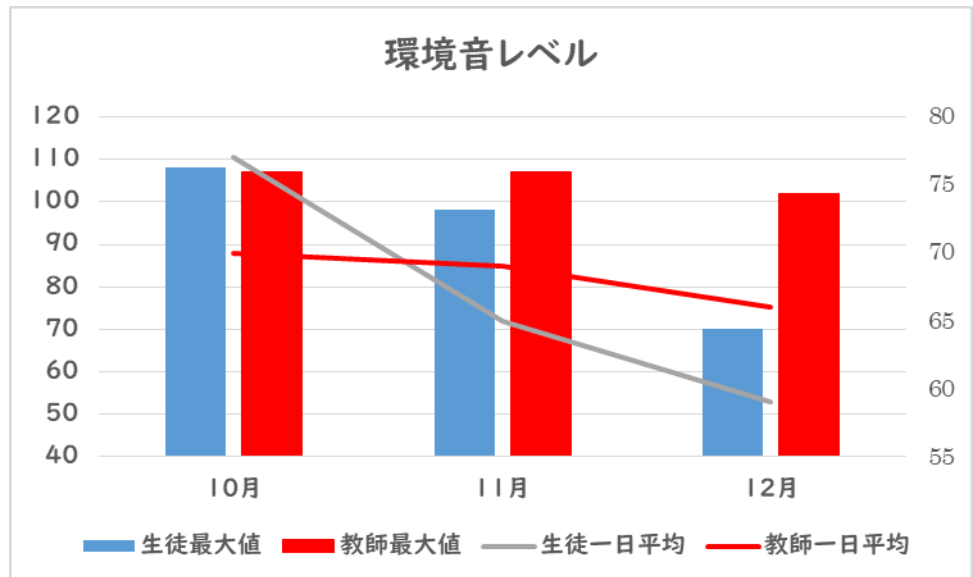


DropTalk の使用では、必要なアイコンを選択することで語彙数の少なさを補うことができた。また、使用に際し、最初に教師が作成したシートを用いることで自分の考えをパターン化して整理することができた。その経験を活かし、二語文や三語文の使用が増えたと考えられる。今後、必要なシートを自分で自由に作成することで、さらに会話のバリエーションが増え、発表にも自信をもつことができると考える。

また、DropTalk を使用していくことで、さらに二語文・三語文等の使用が増え、メモ帳やホワイトボードによる筆談においても、それらを使用することが増えていくのではないかと考えられる。

②学校生活の中で、扉の開閉音や人を呼ぶ時の声の大きさを意識できるようになる。

右の図は、本生徒と教師が dB Meter を使用して計測した最大値と一日の平均値のデータ比較である。開始時点では教師と同じまたはそれ以上の数値であったが、日を追うごとに数値が下がっていった。これは AppleWatch に来る通知を見て、自分で環境音をチェックする習慣がついてきたからだと思われる。荷物を高い位置から落とすように机の上に置いていたが、通知を見て、その数値



の大きさにビックリした顔をして教師を見ることが何度かあった。また、戸の開閉や先生を呼ぶ時に大きく机を叩く時も同じである。日頃の生活音を数値で確認することで、適切な行動を身につけていくことができるようになったことが一番大きい変化の要因である。現在はまわりの友達や教師から生活音について注意を受けることも指摘されることもなく、友達に対してアドバイスを送る立場になっている。このことから、聴覚に課題のある生徒にとって可視化することは、行動の変容に繋がると考えられる。

・その他エピソード

本生徒の積極性もあり、聴覚に課題のある生徒であるが、友達がたくさんできた。その中でもクラスメイトの A とは趣味など共通点も多く、よく話している。A の提案もあり、クラスみんなで遊ぶ時には音に左右されないジェスチャーゲームをしてみんなで楽しむ姿も見られている。教師と手話で話しているのを見た生徒が手話や指文字に興味を示し、簡単な手話を覚え、やり取りをする場面も見られている。お互いに寄り添いあいながら、楽しく日常生活を送る姿を見ることができたことも、本研究を通して本生徒が得た大切な財産であると考えられる。